

一九〇五年三月に、早くもムージルは草稿を出版社に持ちこんでいる。「小説の新しい書き方を模索する、少々常道から逸れるところのある作品」(一九〇五年三月二二日付けの手紙。I, 18, B14)として。とはいえ作家が、これは前衛的な傑作であるという主張を巧みに隠したので、売れ行きが良かった(一九〇七年四月に第五刷が告げられた)³¹ だけでなく、ほとんどの読者は——今日でも一部の読者は——周知のことにしか気づかなかった。つまり思春期の寄宿生の物語のリアリズムと心理学だ。当時は数年間にわたって、学校小説が好況を呈していた。一九〇二年にエーミール・シュトラウス的小説《友ハイン》とリルケの短編《体操の時間》が出て、四年後にはフランク・ヴェーデキントの《春のめざめ》が初演された。同じ年に『テルレス』とともにヘルマン・ハッセの小説《車輪の下》が出た。学校教育改革論にのめり込んだ読者は、ムージル

31 ただしこの累積三〇〇〇、四〇〇〇、五〇〇〇部増刷の告知は「倒産に瀕した出版社の宣伝によるトリック」だった可能性がある。(Corino, Musil-Forum, 2012/13, S. 281)

の中心人物たちの独力で認識を得ようとする姿勢を、伝統的な学校制度に対する批判と解釈した。「多くの人は、『告白本』ではないにしても『体験談』を眼前にしていると思った。とりわけ教育者たちはぼくから『さらに詳しいこと』を聞きたがった。ぼくは回答を送って、力の限り連中をいやというほどがっかりさせてやった」(MHI, 1969, p. 967)。

サディズムや同性愛といったスキャンダラスなテーマでスパイスを利かせた幼年学校小説という仮面の背後に、果敢な哲学的小説が隠れていることを見抜いたのは、ごく少数だった。すでにムージルの処女作においても、筋や外観は、精神的な内容を表現するための手段にすぎない。『テルレス』にはフリードリヒ・ニーチェによって導入された、一九〇〇年前後の認識論や、今日アルベルト・アインシュタインやジークムント・フロイトなどの名前と結びつけられる人間科学における、画期的な変